SHINJUKU

FORUM 25

しんじゅくフォーラム

「結婚」から考える
男女のパートナーシップ

わたしたちのワークライフバランス／お見合い現場から見る結婚最新事情

SHINJUKU
FORUM 25
しんじゅくフォーラム

CONTENTS

フォーラム・メッセージ
峰 竜太 1

特集
「結婚」から考える
男女のパートナーシップ 3

Part Ⅰ 結婚 marriage

向井万起男さんインタビュー 5
「相手への感謝の気持ちを忘れなければ、
何があっても乗り越えられる」

二人の暮らしをリ・デザインしよう 11
―定年後の夫婦関係を考える―
サントリー次世代研究所 狭間惠三子

夫婦間の暴力は犯罪です! 15

わたしたちのワークライフバランス
①共働き・子育て中 9
②子育て終了 10
③DINKS 13
④専業主婦・子育て中 14

Part Ⅱ シングル single

独身男性本音座談会 17
―一人がラク? 女友達がいれば、それで十分ですか?―

独身でいることに不利益はないけれど 20
長友佐波子

寄せ集まりの家族だけれど 21
―独身の私が知った家族で暮らす楽しさ―
横森美奈子

お見合い現場から見る結婚最新事情 23
日本青年館結婚相談所所長 板本洋子

Part Ⅲ 離婚 divorce

離婚お助けガイド 26

新宿区の男女共同参画事業 27
新宿区男女共同参画シンポジウム開催報告 29

●表紙イラストレーション コーチはじめ
●撮影 吉江好樹、鶴田孝介

結婚生活では、男が一歩引くことも大事です

峰 竜太

みねりゅうた（タレント）
1952年、長野県下伊那郡下條村生まれ。妻の海老名みどりさんは故林家三平師匠の長女。新宿区在住。「アッコにおまかせ!」（TBSテレビ）、「ペット大集合! ポチたま」、「出没! アド街ック天国」（いずれもテレビ東京）、「ナッ得! ニッポン」（BS朝日）などのレギュラー番組をはじめ、さまざまな番組に出演。軽妙なトークと明るく飾らないキャラクターで人気。

結婚して今年で31年になります。素晴らしいでしょう。最近しみじみ、夫婦として本当にいい感じになったなあ、絆が深まったなあと思います。カミさんのことがすごく好きだし、どんなきれいな人よりも、うちのカミさんの方がきれいです! いやこれ冗談抜きで。カミさんにもいつも言ってるんですよ。きれいだよって。人がなんと言おうと、僕にとってはカミさんが一番。家の中ではとても明るくて楽しい人だし、仕事の面では、テレビ局や制作会社の人に事細かに気を配って、タレント峰竜太を盛り立ててくれています。僕にとってはどちらも本当にありがたいことです。

うちのカミさんは、皆さんご存知のように気が強いです（笑）。朝ご飯は作らないし、いってらっしゃいを言うわけでもない。まあ、だいたい寝てるんですけどね（笑）。その状態を僕は〝我慢している〟わけではないんです。

僕は、結婚披露宴のスピーチを頼まれると、「男としてのプライドを捨てるプライドを持て」という話をします。男ってどうしても「なんで俺が（こんなことしなきゃならないんだ）」という気持ちがあって、それを捨てるのはなかなか難しい。僕も結婚した当時は、なんで俺がと思うことがありました。それでよく夫婦ゲンカもした。それが30年たった今は、「いいよいいよ」って思えます。一歩引くことも男の度量。僕は海老名家という芸能一家の娘と結婚して、しかも当時の僕は芸能界で売れていなかったから、一歩引くことが自然に身についたんだと思います。今考えると、このことは結婚生活にとって、とても良かった。

1月に新居が完成したのですが、家を建てるという一大事でもうちの場合はカミさんが主導権を握っています。カミさんは万事において、「私が引っぱっていってあげてるのよ」と思ってるし、僕は僕で、「僕が主導権を握らせてあげているんだ。カミさんが好きなようにやれるのは僕のおかげだ」と思っている。そういうふうに、お互いがいいように受けとめていればいいんじゃないでしょうか。

結婚したとき僕は23歳でカミさんは22歳。若いですよね。30年の間にはいろいろあったけれど、お互いによく頑張ったなと思います。結婚は面白いですよ。今はとにかくカミさんと子どもたちの笑顔を見るのが喜びです。ちょっとかっこよすぎますか? でもしょうがないですよね、本当にそう思うんだから。

特集

「結婚」から考える男女のパートナーシップ

女性も男性も、個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会は、
同時にまた、結婚していてもしていなくても、子どもがいてもいなくても、
自分らしく生き生きと生きることのできる社会です。
男女共同参画社会の実現のためには、男性と女性のお互いへの理解と協力、すなわちパートナーシップが不可欠。
男女が共に人生を生きる「結婚」は、男女のパートナーシップを考える上で、重要なテーマです。
現在結婚中の人、シングルの人、結婚相談所所長、熟年離婚についての本を著した人、
さまざまな立場の人にたっぷりとお話をうかがいました。

結婚して20年。ほとんど別居生活だけれど、自分が不幸だとは思わない。女房は僕に尽くすために生まれてきたわけじゃないから。人は男女を問わず、本当にやりたいことをやっているのが一番幸せだと思います。

慶應義塾大学医学部助教授
病理診断部部長　向井万起男

私の仕事が忙しいと夫が家事を手伝ってくれることもありますが、本音を言えば、もっともっと頻繁に手伝ってほしい。

新宿区在住　日比谷英輔さん
姜　槿伊さん

定年後にどういう生活を送るのか話し合うことを避けて、夫婦それぞれが異なる未来を思い描いているのは、やっぱりちょっと変ですよね。

サントリー次世代研究所　狭間恵三子

結婚していく力は、いろんな人とぶつかることで養われます。パソコンの前に座っていたり、ただ天井を見ていて養われるものではありません。

日本青年館　結婚相談所所長　板本洋子

一人暮らしや核家族が当たり前に思われているけれど、人と触れ合って生きるのは、多少の面倒はあっても得るものもいっぱいあって、いいものだと思います。

ファッションデザイナー　横森美奈子

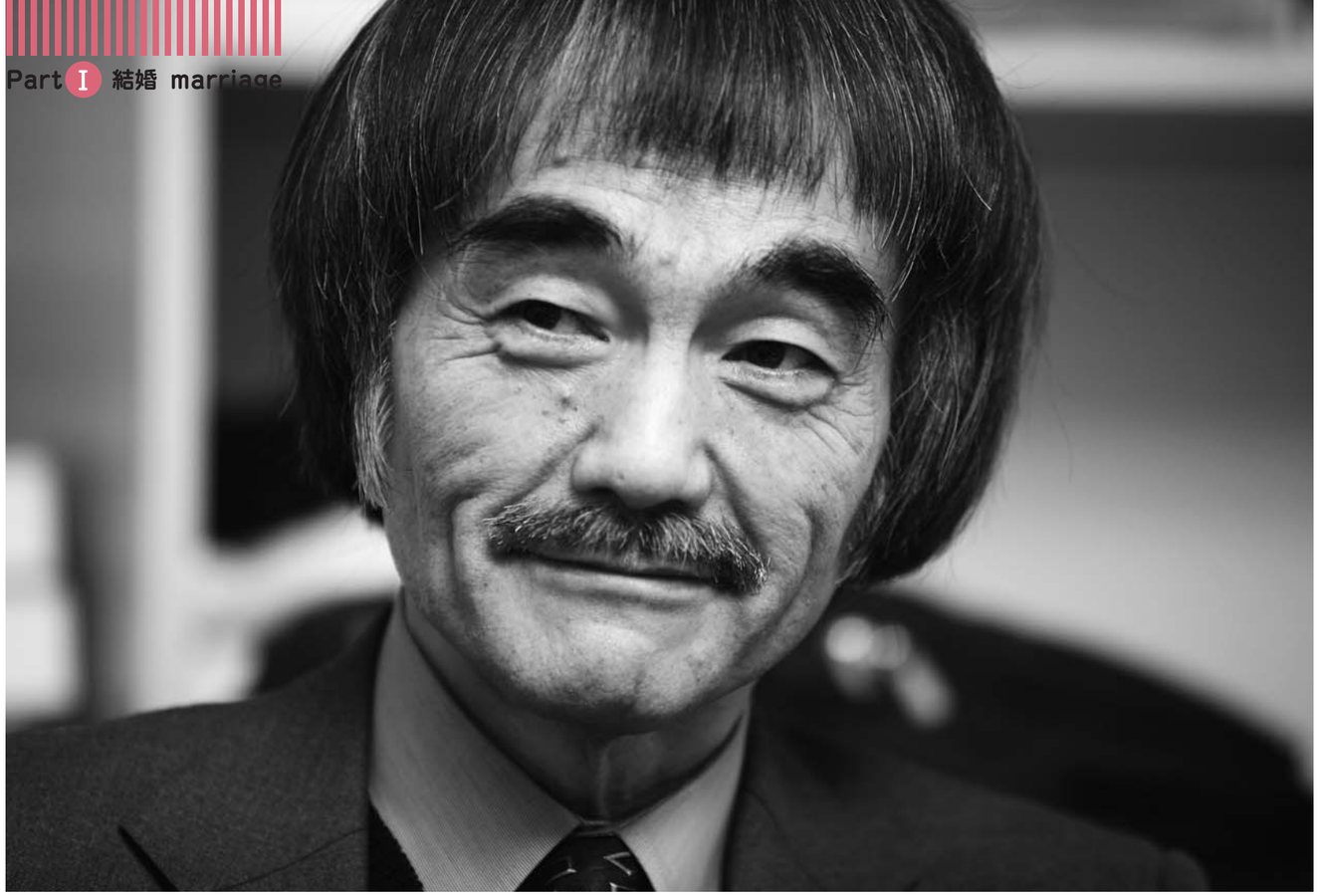
**働く女性は結婚したら、家事に仕事に子育てと
いろいろ考えざるをえないのに対し、
男性はあまり考えていません。**

朝日新聞記者　長友佐波子

向井万起男さんインタビュー

相手への感謝の気持ちを忘れなければ、何があっても乗り越えられる

日本人女性初の宇宙飛行士、向井千秋さんの夫、向井万起男さん。千秋さんが1994年にスペースシャトルに搭乗して以来、夢を追い続ける妻と、精一杯応援する夫という夫婦のありようは、多くの日本人の心をつかんできました。二人の出会いと結婚、宇宙飛行を目指す千秋さんの奮闘努力をつづったロングセラー『君について行こう』の著書もある向井万起男さんに、結婚生活についてうかがいました。



二人は、無二の親友同士として6年間を過ごした後、1986年に結婚した。既に宇宙飛行士に選抜されていた千秋さんは、結婚半年後には搭乗科学技術者（スペースシャトルの中で科学実験を担当する宇宙飛行士）としてNASAジョンソン宇宙センターの宇宙生物医学研究室に留学。その後はアメリカをベースに暮らした。さらに、2004年からはフランス・ストラスブールにある国際宇宙大学の客員教授を務めており、現在はフランス在住だ。

一方、万起男さんは、慶應義塾大学医学部助教授・病理診断部部長として新宿区信濃町の慶應義塾大学病院に勤務し、東京住まいである。

「僕たちは別居結婚の大ベテラン。しかし夫婦仲は磐石です！」

と、万起男さんは断言する。

本当にやりたいことをやるのが人の幸せ

結婚して20年になりますが、その間女房と同居していた期間は全部合わせても2年半ほど。この状態に対して、「奥さんはご主人の面倒も見ないで外国に行きっぱなしで、ご主人はよく我慢してますねえ」なんて言う人がたまにいるけれど、そういう感覚は僕にはまったくないんです。つらいとか自分は不幸だとか、まるっきり思わない。なぜなら、女房は僕に尽くすために生まれてきたわけじゃないから。

ヒューストンのショッピングモールで。

『君について行こう』から向井万起男さんが"立派な夫"になるまで

万起男さんが千秋さんに結婚を申し込むと、千秋さんはこう言った。

「私は向井先生が大好きだけど、結婚ということになると心配なことが一つある。私は宇宙飛行士になることができたら、宇宙への夢を追い続けたいし、そうでなければ心臓外科医として一生働いていたい。自分の夢を追い続けたい、一生働いていたいという女性の結婚相手は、そういうことに理解のある男性でないとマズイんじゃないかと思う。でも、向井先生は、そういう男性ではないような気がする。向井先生には男女平等という気持ちがないから。何となく、男性と女性は別だっていう差別意識みたいなものがあるような気がする。そういう男の人って、奥さんが夢を追い続けることや、一生働くことに理解を持ち続けることが難しいんじゃないかなあ」（要約）

それに対して万起男さんは、自分は確かにそうかもしれないが、口先だけで男女平等を言う男よりは、本心を見せている分だけ安心だ。君が一生働くことを邪魔しない。オレは女には優しい男だ。これからは男女平等の意識を持つと説得。

「やっぱり不安だなあ、そんなに簡単に変わるかなあ」と言っていた千秋さんも結婚を承諾するが、結婚後に、万起男さんの心ない言葉に傷つくことになる……。

＊＊＊

チャレンジャーの事故でNASAのスペースシャトル計画が中断されていたとき、千秋さんは自分が飛べない宇宙飛行士で終わ

僕は、人間は男女を問わず、本当にやりたいことをやっているのが一番幸せだと思います。この考えは僕という人間の根本にある。だから、女房が宇宙飛行士としてやりたいことをやっている姿を見るのが一番楽しい。それは生き生きしてますよ。逆に、僕に一生を捧げますなんて言われたら困っちゃう。大事な自分の一生を捧げるに値する他人なんていないんですよ。

あっ。だけどね、僕はちょっと違うんだ。僕は女房に一生捧げてもいいと思ってるんだ、本当に（笑）。

結婚したら添い遂げるタイプ

つらいとか不幸だとかは思わないけれど、寂しいことは寂しいですよ。去年、二人で過ごしたのは5日間だけ。でも今は携帯電話からも国際通話ができるし、メールもできる。会話の中身？　ほとんどバカ話です。バカ話が最高に楽しい。

だけどね、電話やメールでコミュニケーションをとることはとても重要なんだけれど、別居していても夫婦仲が磐石と言えるのは、二人の「性格」によるところが大きいと思う。

女房は結婚して半年でアメリカに行っちゃったけれど、もしあの時女房に、「マキオちゃん、これから20年間一度も帰ってこられないし、電話もできないけれど待っててね」と言われていたとしても、僕は待ってた。結婚していなかったら待たないけれど、結婚した以上、女房から「待ってて」と言われたら待つ。それが日本男児ですよ。これはもう理屈でもなんでもなくて性格なんです。

僕は女房を全力で応援しているから、進歩的な人間だと思われることがあるけれど、実は古いタイプの人間なんです。結婚したら絶対に浮気はしない！　生涯添い遂げる！　そんな僕のことを女房はよくわかっているし、女房も同じタイプの人間だから、お互いに安心して別居生活を送っているんです。

ついでに言うと、世の中には口先だけは女性にやさしいエセフェミニストが多すぎます。古いタイプの僕が考える本当の男のやさしさは、「陰口を言わない、裏切らない、暴力を振るわない」です。

提供 NASA・JAXA

スペースシャトルからの脱出訓練で救命いかだを展開する千秋さん。アメリカ人宇宙飛行士に混ざって、たくさんのハードな訓練をこなした。
向井千秋さんは1952年、群馬県生まれ。慶應義塾大学医学部卒業。医学博士。国際宇宙大学客員教授。慶應義塾大学病院及び他の病院で心臓外科医として診療に従事した後、宇宙飛行士に。1994年と1998年にスペースシャトルに搭乗した。

提供 NASA・JAXA

向井千秋さんは、1994年7月、スペースシャトル・コロンビア号に搭乗。日本人女性初の宇宙飛行士となった。

るのではないかと不安になった。いつになく弱気になった千秋さんの様子を見て、何か言わなくちゃ、励まさなくちゃとあせった万起男さんは……。

「もし、そうなったら（編集部注：飛べない宇宙飛行士で終わったら）、チアキちゃんにはオレの専業主婦になるっていうテだって残されているんだよ。毛利さんや土井さんには、そんなテも残されていないんだよ。チアキちゃんは女である分だけ恵まれてるんだって」

その言葉を聞いて千秋さんが浮かべた、「私が結婚したこの人は、やっぱり何もわかっていない」という寂しそうな表情を万起男さんは見逃さなかった。万起男さんは思う。

「女性だって男性と同じように夢を追い続けることができるんだと思っている女に向かって、言ってはいけないことを言ってしまったことに気づいたが、もう何を言ってもだめなような気がした。黙っているよりテがなかった。私が女房の人生で占めることができる範囲というものの限界を垣間見た気がした。しばらくして、女房は元気なそぶりを見せながら立ちあがると、『うん、きっと、なんとかなるよね。そんじゃ、食事を目いっぱい作るとするか』と言って、台所に向かった」

＊＊＊

千秋さんの搭乗が決まり、万起男さんはジョンソン宇宙センターの近くにある大学病院に留学するという目的を得て、渡米。久しぶりに夫婦で暮らすことになった。「チ～アキちゃん、遊びましょ、という実に軽いノリ」でヒューストンにやって来た万起男さんだったが、千秋さんは連日訓練で多忙だ。しかし万起男さんは、毎日疲れ果てて帰ってくる千秋さんの手料理を期待するだけだった……。

＊＊＊

いつもはニコニコと元気いっぱいな千秋さんも、搭乗日が近づくにつれて不安や疲れを見せるようになる。しかしまたそれをはねのけようと懸命に努力する。そんな姿を見た万起男さんは、千秋さんのために栄養があるものを食べさせようと、買い物をし、食事の用意をし、洗濯や掃除をする〝立派な夫〟に変身して、千秋さんを励まし応援し続けるのだった。

夫婦にとって、忘れてはいけない大切なこと

結婚したことによって、どちらがより多く相手から影響を受けたかといえば、間違いなく僕です。

女房は、僕が間違ってるなと思ったり、それはいけないなと思ったら、ビシバシ注意してくれます。僕も言うけれど、女房が僕を注意したり叱ったりすることの方が圧倒的に多い。僕はそのことに感謝しています。女房が叱るのはおそらく僕だけ。つまり僕以外の人のことはどうでもいいんじゃないですか？　のろけちゃうと。

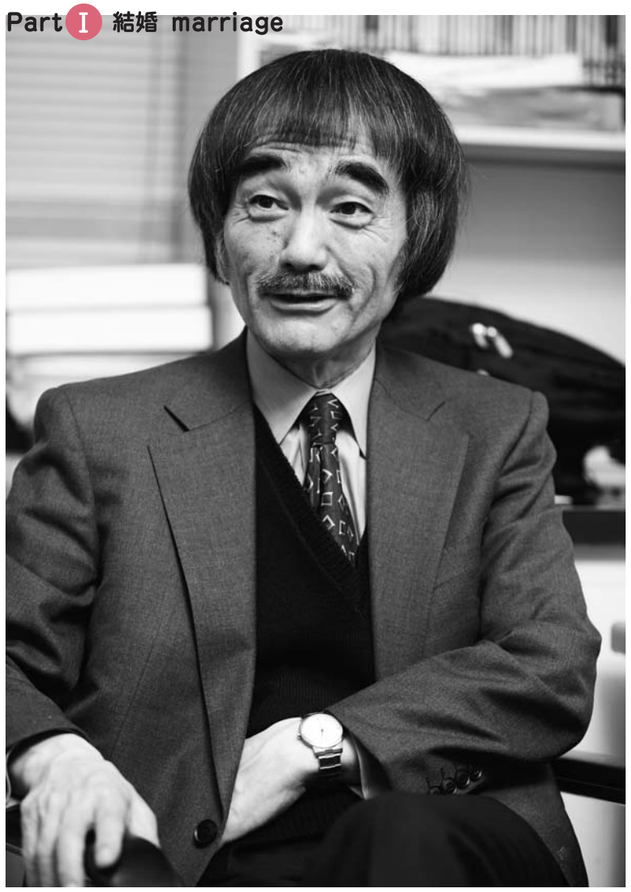
反対に、ほめることもとても大事。相手が素晴らしいことをしたらほめてあげることです。

だけど、結婚でもっとも大切なのは、相手に対する「感謝の気持ち」を持ち続けることでしょう。誰でも我が身を振り返れば、「こんないい加減でどうしようもない自分と結婚してくれた人がいたなんて、ありがたい」と思うはずです。そんな自分と結婚してくれただけで感謝しなくちゃ。このことを忘れなければ、何があっても乗り越えられるもんです。

そして、そういう感謝の気持ちがあれば、相手が自分のためだけに尽くすべきだなんていう馬鹿げた考えなど持たなくなるし、結婚相手がやりたいと思っていることをさせてあげたくなる。応援してあげたくなるもんです。

女房の影響で、僕は物欲も出世欲も権勢欲も激減しました。女房ほど欲のない人間はそうはいないから。宇宙飛行士という肩書きを利用して偉くなろうなんていう気持ちもまったくない。

将来の夢は？　と女房に聞くと、「マキオちゃんと遊ぶ！」これです。僕も、将来は女房と二人で幸せに暮らせれば何もいらない！



むかいまきお　1947年、東京都生まれ。慶應義塾大学医学部卒業、医学博士。現在、慶應義塾大学医学部助教授、病理診断部部長。著書に『君について行こう上・下』、『続・君について行こう』、『ハードボイルドに生きるのだ』（いずれも講談社）などがある。

仕事や家事、そして育児など……、結婚後のお二人は人生のパートナーとして、
毎日の暮らしをどのように役割分担し、お互いをサポートしているのでしょうか？
新宿区にお住まいの4組のカップルにご登場いただき、皆さんのワークライフバランスをお聞きしました。

わたしたちのワークライフバランス

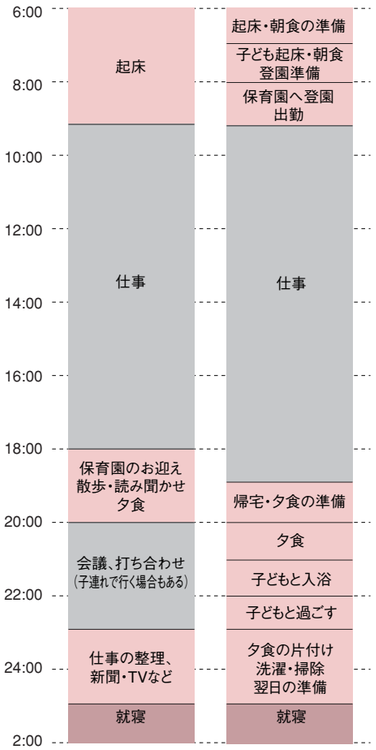
CASE.1 共働き 子育て中

後藤 浩二さん（37歳）NPOスープの会
佐藤 妙さん（37歳）精神保健福祉士
凜音（りん）ちゃん（5歳）・一結（しずく）くん（2歳）

「仕事は忙しい。
だけど子どもと一緒の時間には
恵まれています」（浩二さん）

「協力し合って
“バトンタッチ生活”を
乗り切っています」（妙さん）

1日のスケジュール



新宿区内にお住まいの後藤浩二さんと佐藤妙さん（事実婚カップル）は、フルタイムの仕事を持ち、協力し合いながら5歳と2歳の2児の子育て真っ最中。その様子は、まさに「バトンタッチ生活」です。

浩二さんの仕事は、路上生活者への支援を行うNPOの世話役。

「ホームレスの人たちへの自立支援・地域生活支援活動です。具体的には、路上訪問や電話相談、宿泊所やグループホームの運営などを行っています。ですから、仕事先も事務所だったり、グループホームや個別の訪問先だったりとさまざま。夜、仕事が入ることもよくあります」

一方、妙さんは、精神保健福祉士として精神科のクリニックに勤務。通常、朝8時にお子さんたちを保育園へ送り、そのまま池袋にある職場へ。帰宅時間はだいたい7時過ぎです。

1カ月の予定は、カレンダーで互いにチェック。妙さんの遅番の日や浩二さんの夜の会議などを事前に書き込んでおく。

「保育園のお迎えは彼がしてくれるので、帰ってきたら私が夕食、お風呂を済ませて子どもを寝かせます。彼は、私が帰ってくると、打ち合わせや会議に出かけて行くことが多いですね」

これぞ「バトンタッチ生活」。妙さんが遅番のシフトのときは、帰宅が10時を過ぎてしまうので、浩二さんが子どもたちの面倒をみます。

「仕事があるときは、夜でも職場や打ち合わせ先に子連れで行きます。僕の仕事は時間が不規則な半面、融通がきく。自分が働いている姿を子どもに見せられることも幸せです」

子どもを連れて行けない会議のときは、事前に妙さんが遅番のシフトにならないように、スケジュールを調整。

「昨年、家族4人が体調を崩し、順番に入院したことがあって、そのときはさすがに大変で、友人や同僚に保育園のお迎えを頼みました」（妙さん）

仕事に全力投球しながら、妻と夫のバトンタッチでつなぐ生活です。4人で一緒に食事をする時間と、休みに遠出する時間を増やしたいお二人。子どもたちと一緒の時間を何よりも大切に考えています。

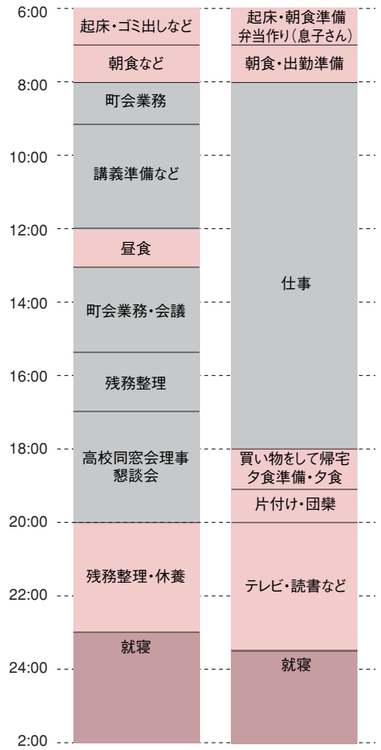
CASE.2 子育て終了

甲野 啓一さん（71歳）
甲野 恵美さん（64歳）

「趣味と地域活動を
存分に楽しんでいます」
（啓一さん）

「好きな写真を
これからも撮っていきたい」
（恵美さん）

1日のスケジュール



甲野啓一さんと恵美さんご夫妻は、子育てを終え、第二の人生を満喫中。お互い支え合いながら干渉はせず、地域活動や趣味、仕事にも前向きで、生き生きとした日々を過ごしています。

長年、原子力関連の技術開発の仕事をしてきた啓一さんは、65歳で退職。自身の研究所を設立して技術指導などを行う一方、地域活動にもとても熱心です。

「10年間、町会長をやらせていただいています。防災活動や資源集団回収活動、町会ニュースを発行したり、フリーマーケットなど、地域に根付いた活動を心がけています」

妻の恵美さんは小学校教諭から校長を務め、60歳で定年退職。その後は、新宿区の「国際理解教室」に嘱託として勤務し、人権擁護委員も兼ね、退職後もほぼ毎日仕事に出かけています。

「退職後に、前からやってみたかった写真を始めました。もう、夢中になってしまって……」と話す恵美さん。重い機材をものともせず、国内だけでなくシルクロードやモンゴルまで写真仲間と撮影旅行へ。コンテストでも入賞するなど、腕前はかなりのものです。

「夫はゴミ出しやご飯を炊いておくなど、家事も協力してくれますが、それよりも、『家にいてほしい』『家で食事をしたい』などと私を束縛せず、好きなことをさせてもらえるのが一番ありがたい」とにこやかな恵美さん。

「私も構われるのは嫌いなんです」とおっしゃる啓一さんは、地域活動に加え、学生のころから続けている山登りを仲間と楽しみ、ハイキング専門誌に寄稿したりとお忙しい。となるといつも別行動のようですが、一緒に山登りをしたり、一昨年は、お二人で初めて海外旅行にも行かれたそうです。自分の時間と夫婦の時間のバランスを上手にとりながら、ますますパワフルなお二人です。

啓一さんの『新ハイキング』（新ハイキング社刊）への記事の寄稿は、在職中から続けてきた。

恵美さんの作品。今年は、雲南省へ撮影旅行に出かけた。

●定年後の夫婦関係を考える●

二人の暮らしをリ・デザインしよう

昨年、『**あなたの知らない妻がいる**』といういささかショッキングなタイトルの本が話題となりました。副題は「**熟年離婚にあわないために**」。夫が定年退職を迎えて、ライフスタイルが大きく変わったとき、夫婦はどうやって互いと向き合うのか……。この本の著者、サントリー次世代研究所の狭間惠三子さんに、定年退職を迎える団塊世代を例に、定年後の新しい夫婦関係についてうかがいました。

『あなたの知らない妻がいる
―熟年離婚にあわないために―』
（講談社）

夫と妻の思い描く定年後の生活イメージには確かにギャップがあります。よく言われるのが、夫は田舎暮らしがしたいと考えているのに、妻にはまったくその気がないというケース。しかし、夫婦間のギャップは定年になったから生まれるものではなくて、長い時間をかけて育ってしまったものだ、ということが、調査研究でたくさんの夫と妻のホンネに耳を傾けてわかったことです。夫と妻がお互いの歴史を理解しないと、夫婦間の溝を埋めることはなかなか難しいと思います。

夫は仕事、妻は家庭で分担してきたが

戦後の第一世代として、さまざまな分野で新しいスタイルを作ってきた団塊世代は、結婚にもそれまでとは異なる価値観を持って臨みました。家と家の結びつきよりも個人と個人の愛情を重視して結婚し、夫婦を核とする核家族、ニューファミリーを作ったのです。

団塊世代の多くが結婚した70年代前半は、高度経済成長の余韻がまだあり、給料は右肩上がり。自分が頑張れば目に見えて生活が豊かになるような、そんな時代でした。男性にインタビューしていると、「社会の渦の中で、いつのまにか会社人間になってしまいました」ということをおっしゃる方がたくさんいます。

一方、妻はそんな夫を支え、家事をすべて引き受け、子どもを育て、家庭を守ってきました。学生時代までは男女同じようにやってきたのに、結婚すれば職場では寿退社が当然で、ましてや出産しても働き続ける人は非常に限られていました。

団塊世代の女性の多くが、「私だって社会でもっといろいろなことができたはずだ」ということをおっしゃいます。そんなやり残し感を挽回するように、妻たちは子育てが一段落すると、パートに出たりカルチャーセンターに通ったり、地域活動に参加したりして、社会参加の充実感を得ようとしました。

しかしそういうときでも夫は、「俺に迷惑をかけない範囲でしろ」とか、「子どものことを考えてからやれ」と言う。対等の関係だったはずの夫がそういうことを言う。妻は、「夫は思いっきり社会で働いているのに、なんで私だけがこんなことを言われ続けるんだろう」と思うわけです。

それでも妻たちは自分なりに頑張って、50歳代も後半になると人的ネットワークもでき、生き生きと活動する場ができています。そんなところへ、夫が、「明日で定年退職なので、一緒に田舎暮らしがしたい」なんて言うわけです。妻にしてみれば、せっかく充実している人生に天から突然夫が降ってきたようなものです。

夫は定年後の生活に何を期待しているのか

団塊世代の男性は、それより上の世代ほど亭主関白ではないですから、仕事にかまけて家庭の雑事や子育てをすべて妻任せにしてきたことに、後ろめたさを感じている人も多い。

けれどその一方で、「僕が一所懸命働いてきたから、家族が心配なく暮らしてこられたんじゃないか。僕の給料で家も車も買えた。全部僕がやってきたんだから、定年で収入がなくなっても、妻はこれまでどおり食事を作ってくれたり、身の回りのことを気にかけてくれる。僕がやりたいことに付き合ってくれる」と、当然のように思っているんです。

しかし妻の側は、「あなたが社会でのびのび働いている間に、私が社会参加を我慢して子どもを育て、家を守ってきた。あなたの役割と私の役割はフィフティ・フィフティなんだから、あなたが定年になった時点で夫婦の収支はトントンだ」と思っています。

だから、夫が定年になっても、自分のやりたいことを抑えてまで夫のために家にいることはしたくない、とおっしゃる方が非常に多い。

それでも、夫に対して「家事の半分を受け持って」と思っているわけではなくて、「私の活動を理解して、多少は応援してほしい」くらいの気持ちです。それなのに、外出しようとするたびに、「僕のご飯はどうなってるの？」と言われたら、やっぱりちょっと「えっ!?　うそでしょ」ってなりますよね。

「僕のお昼ご飯なんか適当にするから、行っといで」の一言で妻は感謝もするし、明日はおいしいものを作ってあげようとも思えるのに、夫はなぜかその一言が言えないのです。

話し合わずに、別々の未来を夢見る

夫が定年退職を機に田舎暮らしをしたいと考えているのなら、時間をかけて妻と話し合う必要があります。もし妻が行きたくないというのなら、週末だけ一緒に過ごすのかどうするのか、二人できっちり話し合わなければならない。だけど、それをまったくしていない夫婦が多いんです。たとえば、奥さんが、「夫は退職したら田舎に住むなんて言って土地まで買ってるんです。私の意見はいっさい聞かないけれど、当然ついてくると思ってるみたいです。でも私は行きません」なんて言っている。

別に一緒に行かなくてもいいんですが、どういう生活を送るのかという話を避けながら、二人で異なる未来を準備しているというのは、やっぱりちょっと変ですよね。

先日、50歳代の大学の先生方（男性）と話をしたのですが、「夫婦なんてちょっと離れてるくらいでちょうどいいんだよ。まともに向き合って話し合ったら、離婚するだの、もう出ていきますだのってことになるに決まってるんだから。一つ屋根の下に住んで別々のこと考えてるのが一番平和なんだ。ワッハッハ」とおっしゃっていました。

それもわかる気はするけれど、奥さんも同じように考えているかどうかは、確かめないといけないと思います。

それぞれ勝手に行動して、単なる同居人のように暮らすことをお互いが了解していれば、他人がとやかく言う必要はないけれど、インタビューすると奥さんはそうは考えていないケースが多いんです。

完全に割り切ってしまって、いつ帰ってくるのか何をしているのかも知らないで、それでなんで夫婦なんだろう、理解し合わないで夫婦をしているというのは、どういうことなのか、と考える奥さんが多い。考えてみれば当然ですが。

二人にとって心地良い暮らしを探して

夫は会社、妻は子育てと役割分担をしている間は、逆にそれほどコミュニケーションはいらないかもしれません。家庭はあなたに任せた、経済はあなたに任せたと、夫婦で別機能に邁進してきたからこそ、効率的に家庭を運営できたという面もあるでしょう。しかし、定年退職を迎える頃は、子育ても終わっている場合が大半でしょうから、夫と妻それぞれの役割がなくなってしまう。やることのなくなった二人が向かい合って、「で、どうする？」と。

そうなったら、やはり話し合うしかないでしょう。お互いがやろうとしていること、今後はどんな生活をしたいのかを話してみて、一緒にできることがあればやればいいし、二人にとって心地良いスタイルを作っていく。それが夫婦のリ・デザインです。既に退職後の生活をスタートしている上の世代に話を聞くと、皆さん1年や2年の時間をかけて、新しい生活パターンを探っていらっしゃるので、そのくらいの時間をかけてでも二人の新しいスタイルを作っていかなければならないと思います。

お互いの距離がこんなに離れてしまった、じゃあリセットしよう、離婚しよう、ではあまりに寂しいし、夫婦はそんなに簡単なものでもないはずです。お互いが別々の方向を向いたまま暮らしていくのもつまらないし、上の世代が実践してきた、〝妻が我慢して夫についていくスタイル〟も団塊世代の女性には無理があると思います。そもそもどちらか一方が我慢するのは、幸せな関係とは言えないでしょう。

もともと団塊世代は話し合うことが得意な世代。夫婦ゲンカになったとしても、やってみる価値はあると思います。

はざまえみこ　1960年、大阪生まれ。立命館大学文学部卒業。'82年サントリー入社。人事部、広報部を経てサントリー不易流行研究所へ。2005年サントリー次世代研究所に名称変更。主な研究テーマは家族関係・親子関係、現代人のコミュニケーション・付き合い方など。大阪文化財センター評議員、大阪地方裁判所委員会委員、京都府消費者生活審議会委員などを務める。

わたしたちの
ワークライフバランス

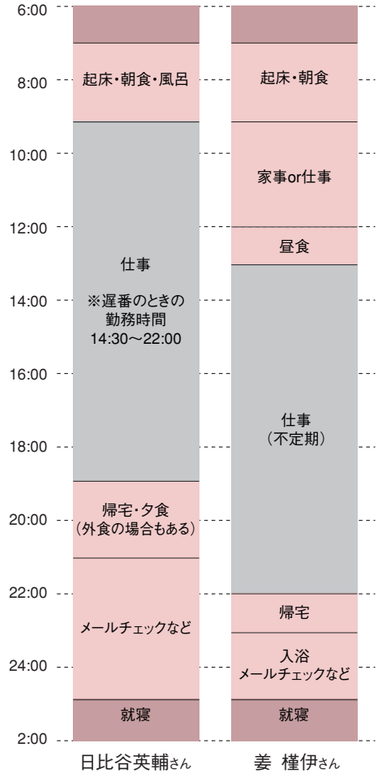
CASE.3 DINKS

日比谷 英輔さん（38歳）
（社）日本芸能実演家団体協議会勤務
姜（かん） 槿伊（くに）さん（39歳）韓国語通訳・翻訳者

「妻のために、
今年は料理に挑戦します」
（英輔さん）

「仕事が忙しいときは、
もっと家事を手伝ってほしい」
（槿伊さん）

1日のスケジュール



知人を介して韓国・ソウルで知り合った日比谷英輔さんと姜槿伊さん。槿伊さんは結婚のために10年前に来日。二人とも仕事を持つDINKSカップルです。

英輔さんの仕事は、日本芸能実演家団体協議会が運営する「芸能花伝舎」の運営やセミナーの企画。

「職場は自宅から歩いてすぐですが、午後出勤があったり、土・日でも仕事になることがあり、時間は不規則です」

槿伊さんは韓国語のニュースの翻訳、セミナーやシンポジウムの通訳の仕事をしています。

「突発的な事件があると、夜中でも電話で起こされてテレビ局に行って仕事。そんなときは、戻るのは朝になることも。特にここ数年は、韓国・北朝鮮関連のニュースが多く、とても忙しいです」

シンポジウムの通訳の仕事では地方出張もあり、家を空けることも多い槿伊さん。家事は英輔さんと分担しているのでしょうか？

「普段は、私が時間を見つけて掃除や洗濯をします。私が忙しくて、なかなか手を付けられないと、夫が見かねて手伝ってくれることもありますが、本音を言えば、もっともっと頻繁に手伝ってほしい」

この言葉にうなずく英輔さんですが、家事の中では料理が一番苦手。槿伊さんがいなければ、外食で済ませ、キッチンに立つこともありません。

「簡単なものでいいので作ってほしいと思っていたら、昨年の大晦日、年越しそばを作ってくれました。とても感動しました！」と喜ぶ槿伊さん。それなら「今年は他の料理も挑戦してみよう」と張り切る英輔さんです。

英輔さんが今までよりも積極的に家事に協力することで、槿伊さんの負担も少し軽くなりそうです。

「二人とも旅行が大好きなのですが、最近はなかなか実現しませんでした。今年は一緒に休みをとって、まず、ソウルへ里帰りします」と英輔さん。ぜひ、実現させてください。

西新宿の高層マンションに引っ越してきたのは2年前。お気に入りの新宿中央公園や、英輔さんの勤務先「芸能花伝舎」が見えます。

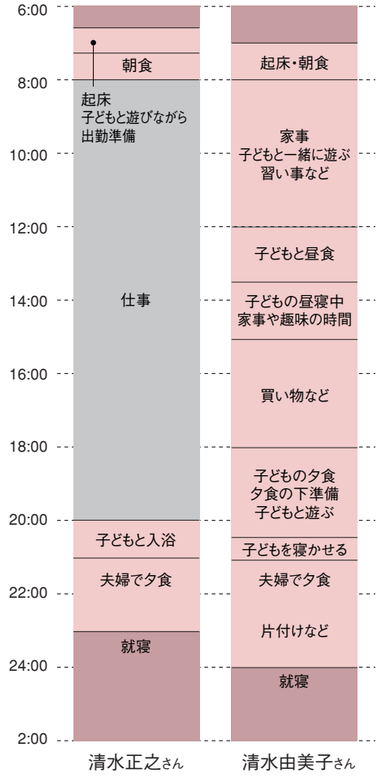
CASE.4 専業主婦 子育て中

清水 正之さん 外資系メーカーに勤務
清水 由美子さん 専業主婦
里紗ちゃん（2歳）

「家では、
子どもと一緒の時間が
最優先です」（正之さん）

「子ども中心の生活に
満足です」（由美子さん）

1日のスケジュール



清水正之さんと由美子さんご夫妻は4年前に結婚。結婚が遅かったので、すぐに子どもが欲しいと思い、結婚を決めた時点で由美子さんは仕事を辞めました。2年前に里紗ちゃんが誕生し、ただ今、子育て真っ最中です。

ほとんど自分の時間はないという由美子さんですが、今は子ども中心の生活に不満はありません。

「午前中は、子どもと一緒に児童館や公園へ。お昼ご飯のあと、子どもがお昼寝をしている間に家事を済ませ、時間があれば週末遊びに行くところをネットで調べたりします」

子どもと過ごす時間のなかで由美子さんが一番楽しみにしているのが、週1回の親子スイミング。里紗ちゃんの日々の成長を楽しみながら、育児に積極的です。

外資系のメーカーに勤める正之さんは、平日は朝8時過ぎには出勤、残業がなければ夜8時ごろに帰宅します。仕事が休みの週末は、正之さんにとって子どもの相手をしてゆっくり過ごせる貴重な時間。時には、新宿区内に住む祖父母の家を訪ねることも。

「普段は、朝の出勤前と、帰宅してお風呂に入れるときだけが子どもとの時間なので、週末が待ち遠しいですね」と目を細める正之さん。正之さんが子どもの相手をしてくれる間に、由美子さんは普段できない用事などを済ませます。

「子どもができたら自分たちの時間はなくなるって覚悟していましたから、苦にはなりません。この子はおとなしいし、夜泣きもなく、病気もほとんどしないので思ったほど大変ではないですね」と話す正之さんと由美子さん。

交際期間には、スキューバダイビングやスキーを一緒に楽しみ、同じバンドのメンバーとして音楽活動もしていたそうです。今は、それもしばらくお休みですが、子どもを寝かせたあとに遅い夕食を一緒にとり、DVDを観たり音楽を聴いたり、夫婦の時間も楽しんでいます。

里紗ちゃんもパパが大好き。お仕事がお休みの日はたくさん一緒に遊べます。

夫婦間の暴力は犯罪です！

― やまぬDV被害 ―

些細なことに立腹し、妻に対して殴る蹴るの暴力を振るう。
「おまえは俺の奴隷だ」などと言い放ち、言葉の暴力で女性を支配しようとする。
社会ではごく常識的な人と見られている男性が、家庭内では豹変し、暴君として振る舞う。
これまで見過ごされてきたこういった暴力から被害者を守るために、DV法が制定されて6年。
被害を訴え、相談に訪れる女性の数は増え続け、この問題の根深さを如実に示しています。
そこには、暴力の容認と、男尊女卑の考え方が根強く流れています。

増え続けるDV被害

DV＝ドメスティック・バイオレンスがますます増加しています。正確にはDVそのものの増加というよりも、被害者が相談に訪れる件数が増え続けています。全国の「配偶者暴力相談支援センター」に寄せられた相談件数は、平成17年度に5万2145件と過去最多になりました。

DVとは、配偶者など親密な関係にある人、あるいはかつてそういう関係にあった人から振るわれる暴力のこと。内閣府の調査では、女性の約4人に1人が身体的暴行を受けたことがあるという結果が出ました。

「たとえば外で誰かに暴力を振るって怪我を負わせたら、その人には社会的な制裁が加えられます。ところがこれまでは、家庭内の暴力だけが犯罪とみなされませんでした。多くの女性たちが、配偶者からの暴力で命を落としているのにです」

こう話すのは、新宿区福祉事務所の湯浅範子さん。

「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（いわゆるDV法）が制定されたのが平成13年4月。このときはじめてDVという言葉を知った方も多いのではないでしょうか。その後平成16年に改正され、それまでプライベートな問題だと見過ごされてきた家庭内での暴力が、大きな社会問題として取り上げられるようになり、被害者を守るための制度や仕組みができました。裁判所が加害者に対して被害者への接近を禁止したり、住居から退去させたりする保護命令が出せることなどが定められたのです。

今年（平成19年）はDV法の2回目の見直しの時期。被害者支援団体からは、配偶者に限られている対象を恋人にまで広げるなど、実効性の高い改正を期待する声が寄せられています。

DVの背景には、根深い男尊女卑がある

DVの背後にあるのは、相手を自分の思うままにコントロールしたいという欲求で、「女は男に従うもの」「男性優位」といった男尊女卑の考え方がその根底にあります。強い者が弱い者を支配し、暴力で物事を解決しようという暴力容認の考え方や、「夫が妻に暴力を振るうのは、ある程度は仕方ない」といった時代錯誤な社会通念がまかり通っていること、男女の経済的格差も原因にあげられています。

精神的な暴力もDV

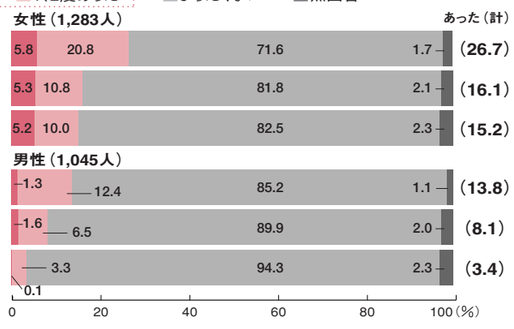
DVには、大きく分けて次の3種類の暴力があり、それらが重なって起こることが多くなっています。

①身体的なもの
殴る、蹴る、首を絞めるなど身体への暴行。

②精神的なもの
怒鳴る、無視する、人の前でバカにする、命令する、生活費を渡さないなど、心無い言動や行動で相手の心を傷つけるもの。

③性的なもの
いやがっているのに性行為を強要する、無理やりポルノビデオを見せる、避妊に協力しないなど。

配偶者からの被害経験（内閣府「男女間における暴力に関する調査―平成18年4月」より）



暴力から逃れられない女性たち

被害者である女性たちは、なぜ暴力から逃れることができないのでしょうか。その理由はいくつかあります。

①恐怖感
「殺されるのでは」「暴力がもっとひどくなるのでは」という恐怖感から、逃げ出せない。

②無力感
暴力を振るわれ続けることで正常な判断ができなくなり、無気力状態になってしまう。

③複雑な心理
私を愛しているから、私がだめだから暴力を振るう、というように、暴力の原因が自分にあると思い込まされ、被害者だと自覚できない。

④経済的問題
被害者に経済力がなく、一人では自活できない。

⑤子どもの存在
子どもの安全や就学の問題。

⑥失うものが大きい
これまでの仕事や人間関係を失う可能性。

暴力の衝動を抑えられない男たち

加害者には一定のタイプはありません。人当たりがよく、社会的な信用もあり、「家で妻に暴力を振るっているなんて信じられない」と思われる人も多いのです。

配偶者に暴力を振るう男性は、強い者が暴力を振るって弱い者を力で抑えつける感情の爆発、暴力の衝動を抑えることができません。

「本当に問題にされるべきなのは、こういった男性たちですが、まだ日本では加害者に対する処罰も不十分で、自分が変わらなくてはいけないという意識が低い。自分に非があると認めない人の治療はできないのが現状です。夫婦が対等の立場なら、DVではなく、喧嘩になるんです。DVの根本には、対等ではない夫婦関係、相手を支配しようとする男女関係、それを容認する社会があります。恋人同士にもDVがある。デートDVと呼んでいますが、これも社会や教育、家庭など暴力を否定しない環境から生まれてくるものだと思います」と湯浅さんは言います。

DVは犯罪です。暴力はいかなる場合にも認めてはならないこと、暴力では物事は何も解決しないということを、教育のなかで根気強く伝え、浸透させていくことが大切です。

配偶者からの暴力に関係する相談件数（内閣府調査より）

配偶者暴力相談支援センター

①年度相談件数

平成14年度	35,943件
平成15年度	43,225件
平成16年度	49,329件
平成17年度	52,145件
合　計	180,642件（1月平均3,763件）

平成17年度は、年間5万件を超える相談

②性別相談件数（平成14年～17年度）

女　性	179,728件（99.5%）
男　性	914件（ 0.5%）

相談者は圧倒的に女性

相談窓口

配偶者暴力相談支援センター

・東京ウィメンズプラザ
☎ 03-5467-2455（相談）
（年末年始を除く毎日 9:00～21:00）

・東京都女性相談センター
☎ 03-5261-3110（相談）
（年末年始・祝日を除く月～金曜日 9:00～20:00）
☎ 03-5261-3911（緊急）（毎日24時間）

新宿区のDV相談窓口

・新宿区福祉事務所（生活福祉課相談係）
☎ 03-5273-4552
（年末年始・祝日を除く月～金曜日 8:30～17:00）

・女性総合相談
※新宿区の女性総合相談については27ページをご覧ください。

・子ども家庭課子ども家庭相談係
☎ 03-5273-4558
（祝日等を除く月～金曜日 8:30～17:00）

緊急の場合は警察へ110番

これらの相談窓口では、相談以外に、必要に応じて被害者と子どもを一時保護し、その後の住まいや仕事など自立支援の情報を提供しています。被害者が危害を受けるおそれが大きいときには、裁判所から加害者に「接近禁止命令」「退去命令」を出す「保護命令制度」について、助言や援助も行っています。

独身男性
本音
座談会

一人がラク？女友達がいれば、それで十分ですか？

「男は家族を養ってこそ一人前」独身男性に対する、そんな家族や職場からのプレッシャーは、今もあるのだろうか。独身であることのメリットとデメリット、結婚相手に求めること……。30～40代の独身男性の本音と実情を探りました。

［司会］長友佐波子さん
朝日新聞社勤務。結婚、離婚を経て、現在シングルアゲイン。『ハッピーシングル宣言!』（ダウンロード書籍）、『新しい愛のかたち』（講談社、共著）などの著書のほか、「AERA」副編集長時代の編書に「アエラセックスリポート」「わたしの恋愛と結婚」などがある。

41歳。北海道出身。一人暮らし。姉（既婚）。大学卒業後、新聞社、出版社を経て、2002年にフリーライターとして独立。旅行関係の著書多数。

34歳。埼玉県出身。父親と同居。兄（既婚）。大学卒業後、共済組合の団体に就職。株のアナリスト。

32歳。千葉県出身。両親と同居。弟と妹（ともに既婚）。大学卒業後、印刷会社に就職。仕事はプリンティングディレクター。秋頃に結婚予定。

36歳。東京都出身。一人暮らし。妹（未婚）。大学院卒業後、大学講師を経て、法科大学院助教授。

はじめに、どういう経緯で今、独身という状況に至っていらっしゃるのか、自己紹介も兼ねて簡単にお話しいただけますでしょうか。

5年前に出版社を辞めて独立し、旅をして文章を書く仕事をしています。結婚しないつもりはなく、ただ20代の頃からの「自分の本を出す」という夢を追い続けて、ハッと気づいたら40歳になっていました。惚れにくいというか、なかなかときめかず、選り好みしている状態です。

印刷会社に勤めています。32歳です。妹と弟は結婚して子どももいますから、あとは僕だけって感じ。お付き合いするときは結婚を意識しています。彼女と秋頃に結婚予定です。

家から出たことがなく、今も実家から職場に通う34歳です。

ハッと気づいたら
40歳になっていました

仕事は株の運用とそのための企業調査。結婚はしたいなあと思うのですが、漠然としていてイメージがつかめず、結婚して何がしたいのかわからないというのが正直なところです。仕事柄、合コンの誘いもあって参加しますが、ただの飲み会になってしまうことが多く、なかなか発展しません。

大学の教員をしています。今36歳ですが、29歳までは大学院にいて学生でしたので、就職して生活が安定するまでは結婚は考えないことにしていました。そして、いざ就職してみると、学生との対話がおもしろくて。そろそろ結婚しようかなあとも思うのですが、どうしても仕事優先になってしまいます。生活が不規則なこともあり、一人のほうがラクだなあと。家族は何も言いません。

皆さん独身主義というわけではないんですね。そして結婚したくてたまらない、という感じでもない。一人はラクという発言がありましたが、それに関していかがですか。

心の底から言いますが、一人はラクです。とにかく人のペースに振り回されるのが嫌。とくに女性って振り回すじゃないですか。一人暮らしをして8年ですが、何事も自分のペースでできるのが魅力です。

僕もまさにそんな感じです。仕事が忙しくて徹夜したいときなど、人がいたら気を遣いますからね。一人なら自分のペースでできるので、圧倒的にラクです。

お話を聞いていたら、私は一人暮らしをしたら、寂しくなって結婚を急ぐかもと思いました（笑）。

僕は学生時代から8年間一人暮らしだったんですが、長男なので家のことをわかっていてほしいという親の希望もあって、5～6年前に実家に戻りました。戻ったらラクですね。仕事に集中できます。結婚相手に望むのも、仕事への理解が大きな要素です。

結婚ってどんなイメージでしょうか。子どももほしいですか？

奥さんが家にいて、子どももいて……というイメージですね。弟や妹の家族を見ていると、結婚すると幸せそうだなあと思います。

僕は逆で、結婚しても妻は外へ出て、自分の世界を持っていてほしい。24時間待ってますっていうのは、ダメです。たまにしか会えないからドキドキするわけで、会えない楽しさが残っているほうがいいと思うんです。

僕は結婚するなら、奥さんには基本的には家にいてほしい。仕事をしたいなら尊重しますが、子どもがほしいので、子どもが小さいうちは奥さんに面倒をみてもらいたいですね。

家族を養っていくのが経済的にきついとか、重荷だとかは思いませんか？

思わないですね。僕の仕事は非常勤ということでかけ持ちできますし、働けば働いただけ成果が上がるので、そのへんは心配していません。逆に家族がいれば、そのためにもっと頑張れるかなあと。

私は、子どもができても奥さんに働きたいという思いがあって、収入がある程度あるなら、自分が家に入るのもやぶさかではないっていうか。仕事は好きですが、会社にこだわりはないので。

今、彼女がいない方は、その状況をどう自己分析していらっしゃいますか。

意識的に彼女になりそうな状況を避けてきてしまいました。仕事を固めて、きちんと稼いでからでないと結婚できないという思いがあり、とくに相手が30歳前後の女性だったりしたら、無責任に付き合えないなと。

たしかに、この年になると結婚を意識するので、簡単には付き合えないという思いがありますね。私は酒を飲むのが好きなので、一緒に酒を飲める女友達が何人かいればそれでいいかなと。

僕は女友達が多くて、よく一緒にご飯を食べに出かけたりしますが、仲良くなっても、お兄さんとかお父さんと言われるキャラなので、付き合うという感じにはならず……。

一緒に酒を飲める
女友達が何人かいれば
それでいい

そうしますと彼女と友達を比べたときに、彼女にしかできないことってあまりないのでしょうか。外部からのプレッシャーも皆さんあまりないようですし、彼女をつくりたいという動機に至るものもないですか。

いやあ、女友達は所詮友達であって、ときめかないです。寂しさを感じることもありますよ。実家に帰ったときなど、姉にはダンナも子どももいて、俺は一人なんだなあって思いますし、本の出版が決まったときに、その喜びを分かち合ってくれる人がいないのも寂しい。

自分の性格を理解して、悩みごとを聞いてくれる人がいたらとは思います。臆病なんでしょうね。踏み込んで、友達関係までなくなっちゃうんだったら、今の状況で楽しんでいる方がいいかなって思っちゃう。

僕も踏み込んでダメになって、友達でもなくなるのは嫌。友達止まりでも長く続く方がいいなって思ってしまうと、それ以上になりません。たまに寂しいと思ってもインターネットで友達とメールすればまぎれちゃうし、

干渉されないというのは結婚の大事な条件です

そんなふうに感じる暇がないほど仕事が忙しいっていうのもあります。ただ、弱みを見せられる相手がほしいというのはありますね。

うちはプレッシャーもあるんです。長男だし、親は年をとってきていて「あとはおまえの子どもの顔を見るだけだ」って言いますし。ただ、外堀を埋められて結婚しても幸せになるとは思えない。見境なくなるほど惚れて結婚したいと思うんですが、年をとればとるほど余計な知恵がついてきて、先を読み過ぎて躊躇してしまうことが多い気がします。

独身のうちに楽しんでおきたいことってありますか？　独身のメリットって何でしょう？

結婚したら、一人の時間と自由なお金は減るのかなと。最近ゴルフを始めて、家計のことを考えると心配はあるんですが、結婚後もどうにか続けていきたいと思っています。

それはありますよね。僕の場合、どうしても仕事ベースに動きたくて、時間を自由に使いたい。干渉されないというのは結婚の大事な条件です。

独身のメリットといえば、やはり金銭面と時間ですかね。ただ、私は土日が基本的に休みで暇。仕事の勉強をするくらいなので、自由な時間は比較的あります。

僕は料理や掃除が好きなので、家事全般、自分のペースでできるのも独身のメリットだと思っています。分担を決められたり、ペースを乱されるのは嫌です。

ふだんの生活スケジュールを教えていただけますか。

家にいる日は朝6時半に起きて、運動と掃除をします。腕立てや腹筋のほか、自転車で近くの河川敷を10キロぐらい走ったり。9時ごろから仕事を始めて、終わりにするのが夜の9時。缶ビールをプシュって開けて飲みながら夕飯を作って食べ、12時ごろに寝ます。労働時間が長いように思われるかもしれませんが、途中、食事を作ったり仕事以外のこともしていますし、仕事は好きなので苦になりません。

丸1日休みということは、ほとんどないんですが、日曜日はトイレとか風呂場とか家中をまとめて掃除。あと週に1本は映画を観ようと決めているので、時間がとれれば映画を観に出かけます。

その生活のどこに彼女が入る隙間が!?　彼女がいても会えないですよね。

本当に好きだったら、彼女込みのスケジュールを立てますよ。

僕の場合、平日は会社。会社から家まで片道1時間半はかかりますし、なかなか定時では帰れません。あと徹夜の日もありますから、デートするのは週末だけ。土日に仕事が入ることもあります。

私も通勤に1時間半くらいかかるので、家を出るのが朝6時くらい、帰宅は10時過ぎですね。ただ前の駅で降りたりして朝晩30～40分ほど歩いているので、その時間も入っています。自分の判断で仕事を切り上げることもできるので、5時半からお酒を飲んでいることもありますね。

僕は超夜型なので、起きるのは9時ぐらい。昼ごろ出勤して仕事を始め、夜の10時ごろまでやりますね。それから家に帰って、12時くらいから持ち帰り仕事を始めて明け方まで。3時前に寝ることはめったにありません。以前は自炊していましたが、最近は時間がもったいないのと、デパ地下でおいしいものが買えることもあって、夕食はテイクアウトして家で食べることが多いです。

彼女がいても会う時間がないし、やっぱり彼女が入る余地がないじゃないですか。大発奮材料がない限り、生活を変えることはできないのでは？

今は彼女がいないから、そういうスケジュールになっているだけで、仕事中でも何かあれば中断しますし、会いたいって言われれば、スケジュールを調整しますよ。強引に指定されるのが嫌なだけですから。

このままでいくと一人で迎える老後があるかもしれませんよね。それについて考えたことはありますか。

一人でいたらどうなっちゃうのかな、っていうのは考えますよ。

自分の時間だけっていうのは寂しい気がして、誰かのために何かしたいという気持ちがあります。

自分の体に何かあったときに、一人だとまずいな、とは思いますね。マンションのローン返済が終わる24年後まで今のペースで働き続けられるかという不安もあるんですが、かといってそのために嫁をもらうという発想もしたくないなと。

私は実家に住んでいるので、親のことを考えちゃいますね。兄は家を出ているので、父親に何かあったら面倒を見るのは自分なわけで。だからといって、そのために結婚するのは相手にとって失礼だし。その延長で考えると自分が年とったときにどうするんだろうかと。

将来的には、友達の延長で一緒にいて話ができる相手がいたらいいな、そういう結婚もありだなと思います。

今おっしゃった、ゆるやかな結婚みたいな老後のイメージですと、妻でなく、女友達でも代替可能だったりしますか？

そうですね。求めているのが価値観を共有できる人なんだと思います。まったく価値観が違って魅力がある、いわゆるどきどきする人は、僕はだめだと思う。どちらかといえば安心感の方がほしい。女性としてより、人として好き嫌いを判断してしまう。彼女にならずに友達になってしまうのは、そういうことなのかなと最近思うんです。

事実婚についてはいかがでしょうか。女性が姓を変えたくない、って言ったらどうしますか？

僕は、家と家との付き合いを求められるのが結婚だと思うので、どこかでその覚悟を決めて、きちんと入籍したいと思います。女性側のご両親のことを考えたら、いつまでも形のないままでは悪い気がします。

女性が姓を変えたくないって言うのは考えたことがなかった。事実婚というイメージもまったくなかったですね。結婚する＝籍を入れて家族と付き合うというイメージです。

女性は自分の名前をどうするかを常に考えているんですよ。

それはそうですよね。自分の名前はずっと変わらない前提で考えていましたね、たしかに。

皆さん独身でいることに困っていない、生活を楽しんでいるということが、よくわかりました。ありがとうございました。

座談会を終えて

独身でいることに不利益はないけれど

長友佐波子

印象的だったのは、皆さん独身でいることに困っていない、独身でいることが不利益ではないということ。親御さんや職場からのプレッシャーもなく、どうしても結婚したいという内的な思いもない。逆に、結婚しない方がラクチンだなって状況にありますよね。

今の世の中は独身でいる方が、存分に働けます。男の人はわりと結婚しても自分は変わらないつもりで、仕事のペースを落としたくない、マイペースだとか自由を手放したくないと言う。「結婚＝自分も変わらなきゃ」ではなく、結婚生活をどこかで買ってくるものみたいに思っている人が多い気がします。

そう考えると、「宇宙人」と思えるような若い女の子に強引に結婚を求められたり、親御さんが病気になるなど、外部的なプレッシャーがかからないと、なかなか意識は変わらないでしょうね。今まで失うのが怖くて手を出せなかった、とっておきの女友達に「結婚しよう」とアクションを起こしたら、女友達の何人かは「いいよ」と言うのではないかと思うのですが。

働く女性にとって結婚は趣味!?

結婚相手を見つけるのも大変だけど、その人と家庭をつくっていくのはもっと大変です。働く女性は結婚したら、家事に仕事、子育てといろいろ考えざるをえないのに対し、男性はあまり考えていません。

私の経験や見聞を踏まえて申し上げれば、働く女性にとっての結婚は「趣味」のようなもの。暇と余裕がある人がすることです（笑）。男の人はケアしてほしいと思っている人が多いので、時間的、物理的、精神的に余裕のない女性は、結婚したら負担が多いでしょう。

今の30～40代の男性は、家事分担には賛成であっても、実際には家事能力が低い人が多く、料理が得意と言っても、仕事が忙しくなればしないのが現実。ですから女性はあまり期待を抱かず、自分がつくった快適な空間に、ペットとして好きな男性を住まわせているくらいのおおらかな気持ちで、「私は好きな男の人をケアするのが趣味」と思った方がうまくいくと、私は自分の経験から悟りました。

寄せ集まりの家族だけれど

――独身の私が知った家族で暮らす楽しさ――

文・横森美奈子

ファッションデザイナーの横森美奈子さんは、仕事に遊びに独身生活をエンジョイしてきました。しかし40代前半の時、ご両親の介護が必要になったのをきっかけに、ご両親、弟さんとその娘さんと、みんなで一緒に暮らすことを決心したのです。10年あまりの介護生活の後にご両親は亡くなりましたが、弟さん親子との生活は現在も続いています。「寄せ集めでも、毎日一緒に同じご飯を食べていれば家族。人と触れ合って生きるのは、いいものだ」と、横森さんはつづります。

私は１９４９年生まれ。東京は新宿区です。ずっと独身の私ですが、基本的には「結婚」ということにはとてもニュートラルな考えです。そう、「するべき・しないべき」とか「したい・したくない」とかではなく、男女が出会って自然な成り行きのもと、そういうことになるのがいちばんおめでたいことだと。そういう意味では今でも〝嫁入り前〟なのですが（笑）。

私の若い頃は、まだ女性が働いて当たり前の時代ではなく、だから私もデザイン学校で勉強させてもらったものの、卒業後は実家でのんびりしていました。たまたま首を突っ込んだファッションの仕事も、当然〝腰掛け〟のつもりで、自分はいい奥さん、お母さんになることを疑いもしませんでした。

しかし70年代初頭の東京は、やっと芽吹いたファッションという現象がタケノコのようにぐんぐん育っていった時代で、日々目くるめく面白く、またデザインやものづくりの楽しさを知り、気がついたら仕事に夢中になっていました。

でも結婚という人生のノルマを果たしていない後ろめたさがあって、20代の内面の葛藤は相当なもので、仕事はとんとん拍子でも「自分は違うことをしている」と、情緒不安定で悩んでいました。

30歳で結婚していないことにショックで、でも自分にはすでに大きな仕事と大勢のスタッフもいて、そんな思いを引きずってめげながら仕事するのも情けないと思い、前向きに居直ったわけです。一時話題になった「負け犬の遠吠え」ですが、私はとっくの昔に〝負け犬大先輩〟です。

意外とあきらめがいいというか、そうならば楽しくとばかりその後の独身生活は仕事と遊びを謳歌していました。

ところが40代前半のこと、母の病気から実家に足しげく通うようになり、そして母と父に次々と認知症の症状があらわれました。90年代半ばは、まだ介護保険法の成立前。公的なサポートも適当な施設も無く、困りきった私は、父子家庭であった弟と協力しあって、みんなで一緒に暮らすことを選択。自宅介護生活となりました。

こうして私は突然〝ボケ両親つき・子持ちの未婚の兼業主婦〟という、自由気ままな独身生活とは１８０度違う生活となり、介護はもちろんそれなりにたいへんでしたが、ここまでシチュエーションが変わると自分の立場が不思議過ぎて、結構非現実的に思えたり面白がれる部分もあったり。

独身時代の通い介護、父の入院後の病院介護を含め約10年の介護生活が過ぎ、両親を見送った今も、弟・姪との生活は続いて〝未婚の兼業主婦〟は変わりません。私にとって姪（現在大学一年）は愛すべき存在で、家族のいる生活は仕事を抱える私にとっては煩雑な部分はあっても、いい意味の生活感やメリハリがあることはとてもメリットだと思えます。

料理は好きなので、家族との食事はなんとも心なごむ時間です。親子でも夫婦でもないけれど、寄せ集まりの家族だけれど、毎日同じご飯を食べていれば家族なんじゃないかな、と思ったりもします。

いずれ姪は家を離れ、弟も再婚するかもしれません。そしたら、また一人になったら、〝家族〟を探そうかなとも思っています。例えば地方の親戚の子の下宿代わりとか、気のおけない女友達となど、誰でもいいじゃないですか。一緒に暮らせば家族です。

結婚はしていないけれど、家族生活を知ることができてよかったと思っています。きっかけは介護だったけれど、ひょっとして両親はそんなことを私に味わわせたくてボケたのかなぁ、なんて思ってもみたり。一人暮らしや核家族が当たり前に思われているけれど、人と触れ合って生きるのは、多少の面倒はあってもそれと引き換えに得るものもいっぱいあって、いいものだと思います。そう、〝家族〟ってもっと自由であいまいで、ゆるい関係でもいいのではないかしら。

よこもりみなこ　1949年、新宿区生まれ。桑沢デザイン研究所リビング科卒業後、ファッションデザイナーとして活躍。70年代から「MELROSE」「HALF MOON」「BARBICHE」などのブランド・チーフを務める。現在は、大人の女性のためのセレクトショップ「smart pink」のディレクター。近著に『おしゃれライフAtoZ』（日本放送出版協会）、『私の介護days　仕事も、おしゃれも。』（小学館）など。

お見合い現場から見る

結婚最新事情

なぜ晩婚化が進むのか？どうしたら結婚力が高まるの？

日本青年館結婚相談所所長の板本洋子さんに、日本人の結婚観や結婚の最新事情をうかがいました。

結婚を考えられない20代

結婚相談所の開設から26年、結婚したいと訪ねて来る人の動機は、今も昔もあまり変わりません。未婚の人が増えているとはいえ、「いずれ結婚したい」という人が90％近いというデータもありますから、結婚したくない人が極端に増えているとも思えません。

ただ、お見合いを結婚の前提として考える人は確実に減っています。今は気軽にお見合いをする時代。紹介された相手と会って何かが違うと思えば、男女ともに簡単に断ります。

また、「お見合い」という言葉が「出会い」に変わりつつあるのも最近の傾向です。男女の出会いの場を提供するために行政が企画するイベントでも、「お見合い」は「結婚しろ」というニュアンス、強制力を含むとの考えから、「出会い」という言葉が使われています。

私どもの結婚相談所の登録者をみると、男性は30代後半～40代が全体の6～7割を占め、45歳以上の人が増えています。女性は30代が7割です。

晩婚化が叫ばれていますが、今の日本の20代というのは、恋も含めてインターンシップ時代なのだと思います。安定した家庭をつくるよりは、自分の生き方探しで忙しい時期。「食わせてなんぼ」という意識が染み込んでいる男性たちは、経済力が不安定な20代では結婚を考える気になれません。

女性も20代は自己実現を図るために必死。恋人はほしいけれど、何もかも投げ捨てて恋に走るわけではありません。

そんなふうに自分の生き方を探しながら20代を過ごしてきた人は、結婚が人生のすべてだとは思っていません。結婚はした方がいいし、したいけれど、それが絶対的必需品とは思っていないようです。

理想と現実の乖離（かいり）

結婚したいという願望がありながら、しない、できない理由のひとつとして、私は「多様化」というキーワードが挙げられると思います。

たとえば女性は、結婚相手に思いやり、気配り、対等性を求めますが、その一方で男らしさ（責任感や強さ）も期待します。そうやって多面的に相手を見ると、相手がとても未成熟で物足りなく感じてしまうようです。

一方の男性は、「思いやりのある女性」がいいと言う。多くの男性が「僕のことを理解し、家のことは彼女が中心であってほしい」と思っています。それは裏を返せば「頼ってくれる、かわいげのある女性」ということ。強いだけの女性では嫌なのです。

僕が彼女を支えてあげるということで優位性を保ちたいのかもしれません。しかし、女性はバリバリ働いているし、はっきり意見を言う。お店にも連れて行ってくれて、支払いをどうしようかと思っていると、「割勘ね」って言われちゃう。女性のうちに支える部分、守る場所がないから男性はおたおたするわけです。だからといって、女性に全面的に守ってもらおうという気にもなれない。女性だって悲しいこともあれば弱い部分もあるのですが。

生き方が多様化しているにもかかわらず、結婚の理想のイメージは旧態依然。理想と現実が乖離している人が多いように思います。「かくあるべき」という理想のイメージに合う相手などいないのです。おそらく結婚のあり方もイメージも変化していく、今が過渡期なのでしょうね。

親の代理見合いが大人気

親御さんが、どうしたら子どもの気持ちを結婚に向けられるのかと相談に来られた場合には、「あなたが思わず相談所にまで来てしまった気持ちを、お子さんに話してあげたらいかがですか」とお話します。

昔は地域に「寅さん」のような恋の指南役がいましたが、今はそういう人がいませんから。時には親が、自分が恋をした時のことや自分が若い頃に学んだことなどを、対等の立場で子どもに話すことも必要だと思います。

私どもの相談所ではしていませんが、数年前から親の代理見合いが大人気です。全国どこの会場も満員。何回か見学しましたが、すごいですよ。子どもの性別・年代ごとにテーブルが分かれていて、親が子どもの写真と履歴書を交換し合う。

世間になんと言われようと関係なく、親御さんたちがなぜそれほど子どもの結婚に熱心になるのか、心配するのか、子どもには伝わっていないような気がします。親は、子どもが生きていく上で結婚は避けて通れないことと考えています。また、親にとっては子育てを終える卒業式。別に孫とか老後の問題ではないのです。

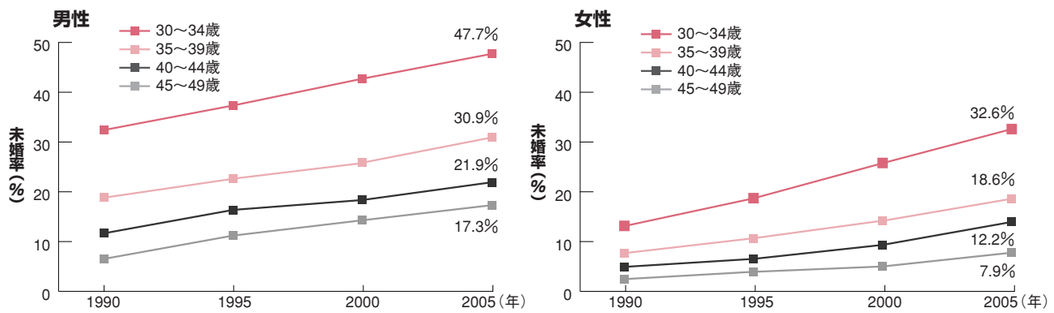
人間関係をつくる力が足りない

結婚が決まった人に話を聞くと、とにかく素直にいろいろな人と会って話をしています。ただ、その前提として重要なのが人間関係をつくる力です。職場でも家庭でも人間関係づくりが難しくなっているように感じます。それは、家庭でできないことを補完していく地域社会のようなコミュニティが失われてきたことも大きく関わっているのでしょう。

働くことに関しても、終身雇用や

いたもと ようこ
1948年、茨城県生まれ。日本青年館結婚相談所所長。結婚や男女の問題に関する調査・研究をはじめ、イベントやシンポジウムの企画・開催、講演など幅広く活躍している。『出会いはいつもドラマチック!? ウエディングベルが聴きたくて』『追って追われて 結婚探し』（ともに新日本出版社）、『花婿学校ーいい男になるための10章』（三省堂、共著）など著書多数。

未婚率
総務省　統計局「平成17年国勢調査」より



年功序列などの制度が崩れ、職場も従来の縦社会ではなくなっています。自由にはなりましたが、その分、まわりの人とうまくやっていけない人には厳しい状況です。人間関係がうまくつくれない人は、殻に閉じこもるしかなく、相手との距離を縮めることができません。そういう人が思い切って距離を縮めようとすると、どうしたらいいかわからないから、ストーカーのようになってしまったりする。追い求めているのか待ち伏せなのか、その調整弁を持ち合わせていないのです。

思い込みからの脱却

人間関係をつくる力について考えると、大人になる過程で、素敵な人にどれだけ出会えたかがポイントだと思います。年齢や恋愛感情に関係なく、魅力的な人にどれだけ影響を受けてきたかです。

残念ながらそのような機会がなかったという人には、今からでも体験していただきたい。趣味やボランティア活動、旅行など何でもいいので、職場や家庭以外の世界に触れてください。人間関係や結婚していく力は、いろんな人とぶつかることで養われます。パソコンの前に座っていたり、ただ天井を見ていて養われるものではありません。

経験や体験の場を増やさなければ、思い込みばかりになってしまいます。人は一人ひとり違うから、ひとつのイメージにはおさまらない。その個性に魅力を感じ、相手と折り合いをつけながら何かを共有していくことが、恋をしていくおもしろさです。全部が決まっていたら、おもしろくありません。

折り合い上手な熟年結婚が理想!?

その意味では、熟年世代のほうが人生経験が多い分、折り合いのつけ方も上手です。最終的には頑固さがネックですが……。私どもの相談所にも10年ぐらい前から、60代、70代の方が増えてきました。離婚や死別を経てという方が多く、今後、団塊世代がリタイアし、ますます熟年結婚は増えると思います。

熟年世代は話題も豊富ですし、とても楽しそう。籍を入れる必要がないから事実婚が多いのも特徴です。いいなと思う人と折り合いをつけて、いいなと思う場所に住む。結婚の究極、理想はこの人たちにあると思うほどです。そういう自由さがないと恋は成就しません。

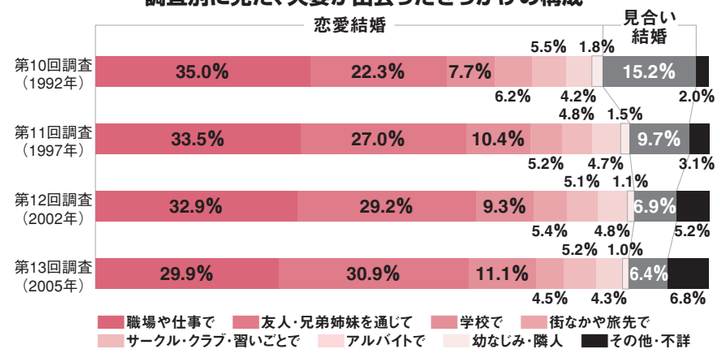
若い人は忙しくてデートする時間もなく、また人生経験も少ない。頭でっかちに育っている人が多く、具体的なイメージが持てないようです。そのため、相手とうまくすり合わせられず、多様な生き方との折り合いがつけられないのです。

結婚してからも、「折り合い」は大切です。家事分担でも、決まりを作り過ぎると息苦しくなります。そして、うまく折り合えない時に男性は「思いやりがない」、女性は「理解がない」と言って相手を非難する。さらには結婚がリスクだと思うようになってしまいます。そうではなくて、ゴムが伸び縮みするような柔軟な関係であってほしいと思います。

私は青を、あなたは赤を選びたいという時にどうするか。違う色だから一緒にやっていけないと考えるのではなく、やっていくための方法を探すことが大切です。お互いの個性を尊重しながら、相手がより赤に、青になるように応援する。

その一方で、お互いの協力が必要な部分は、オーバーラップする紫や、あるいは黄色など別の色を選んで一緒に楽しむ。そのように折り合いをつけていくことが、人間関係づくりであり、パートナーシップです。それを意識的にイメージし合うことが、結婚するときに、また結婚生活を持続させる上でも重要なのです。

調査別に見た、夫妻が出会ったきっかけの構成



出典：国立社会保障・人口問題研究所『第13回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査』より
注：対象は各調査時点より過去5年間に結婚した初婚どうしの夫婦。見合い結婚とは出会いのきっかけが「見合いで」、「結婚相談所で」の結婚

離婚お助けガイド

問題を抱えた結婚生活の解決策として「離婚」を考えても、いざ踏み出そうとすると、
その先には経済的な問題や子どもの養育、仕事や住まい、親・親族との関係など、
解決していかなければならない問題が多々あります。
ここでは「離婚」を考えている方、「離婚」に踏み切った方に、頼れる味方をご紹介します。

【法律相談】

離婚の方法には、①協議離婚　②調停離婚　③審判離婚　④裁判離婚があり、実際に離婚する夫婦のおよそ90%が協議離婚です。
協議離婚でも、財産分与や養育費など、離婚時に決めておいた方が良いことがあります。
離婚に関する法律問題の相談は、以下で行っています。

●区役所の無料法律相談窓口
新宿区では、祝日等を除く水曜と木曜の13：00～15：00に実施しています。当日の9：00から電話で予約を受け付けています。
区政情報課広聴係　☎03-5273-4065

●家庭裁判所の相談窓口
家庭裁判所を利用する際の手続きに関する相談を、書記官・調査官等が受けています。
東京家庭裁判所　☎03-3502-8311

●法テラス
（日本司法支援センター）
法的トラブルを抱えた方に、相談機関や法制度に関する情報を提供しています。資力の乏しい方には、弁護士等専門家による無料法律相談を行い、必要な場合、弁護士費用等を立て替えます。区内に2つの法テラスがあります。
法テラス東京（四谷）　☎0503383-5300
法テラス新宿　☎0503383-5315

【その他の相談】

離婚後の生活に関することや、子どものことなど、さまざまな悩みを相談できます。
主な窓口は以下のとおりです。

●女性総合相談　27ページを参照

●女性相談
（年末年始・祝日を除く月～金曜日　8:30～17:00）
生活福祉課相談係　☎03-5273-4552

●ひとり親相談
（年末年始・祝日を除く月～金曜日　8:30～17:00）

●家庭相談
（年末年始・祝日を除く月～金曜日　13:00～17:00）
子ども家庭課子ども家庭相談係
☎03-5273-4558

【ひとり親家庭への支援制度】

離婚が成立した場合、これからの生活を支えるさまざまな支援制度があります。新宿区にお住まいの方が受けられる、主な支援制度について紹介します。

●児童扶養手当
18歳未満の子どもがいる母子家庭に支給される手当です。

●児童扶養手当受給家庭に対する制度
JRの通勤定期乗車券の割引や都営交通の無料パスなどの優遇制度や、水道料金の減免制度があります。

●児童育成手当
18歳未満の子どもがいるひとり親家庭（母子・父子）に支給される手当です。

●ひとり親家庭の医療費助成
18歳未満の子どもがいるひとり親家庭（母子・父子）の方（親と子）が、健康保険証を使って診療を受けたとき、医療費が1割負担（住民税非課税世帯は負担なし）に減額されます。
※所得制限があります。
子ども家庭課育成係　☎03-5273-4546

●母子家庭への貸付（東京都母子福祉資金貸付）
20歳未満の子を養育している母子家庭の方が経済的に自立して、安定した生活を送るために貸付を行っています。

●母子家庭自立支援教育訓練給付事業
指定訓練講座*を受講し、修了した場合、講座受講料の40%相当額を新宿区が給付します。20歳未満の子どもがいる児童扶養手当受給水準の母子家庭の親が対象です。
＊雇用保険制度の教育訓練給付金の指定訓練講座など

●母子家庭自立支援高等技能訓練促進事業
2年以上の養成期間で修業している場合、修業期間の最後の1／3に相当する期間に訓練促進費として、月額103,000円を支給します。20歳未満の子どもがいる児童扶養手当受給水準の母子家庭の親が対象です。対象資格は、看護師、介護福祉士、保健師、理・美容師など国家資格です。

●家事援助者の派遣
ひとり親家庭（母子・父子）の親、または子どもが傷病や就職活動、技能取得などで日常生活に困ったとき、区が家事援助者（ホームヘルパー）を派遣します。

●ひとり親家庭休養ホーム
親子でレクリエーションを楽しんでいただくため、無料または低料金で指定の施設を利用できます。日帰り施設は東京ディズニーランド、八景島シーパラダイスなど。宿泊施設は約8,500施設あります。
子ども家庭課子ども家庭相談係　☎03-5273-4558

新宿区の男女共同参画事業

男女が性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮し、責任も分かち合う男女共同参画社会の実現に向けた区の取り組みを紹介します。

【男女共同参画施策の推進】

●男女共同参画推進会議

区長の諮問に応じ、男女共同参画に関する基本的事項を調査・審議します。また、男女共同参画施策の実施状況を点検・審議し、区長に意見を述べます。

平成18年7月「新宿区男女共同参画推進計画」に盛り込むべき内容について諮問を受け、現在審議を行っています。平成19年5月答申予定です。

●男女共同参画行政推進連絡会議

男女共同参画に関する総合的な施策を推進するための区の内部会議で、男女平等推進計画の進捗状況などについて話し合います。

●しんじゅく女性団体会議

区内女性団体相互の連携とエンパワーメントを図ることを目的とした会議で、区内女性団体と各会派の女性議員で構成されています。年間のテーマに沿った学習会や施設見学などを行っています。

【女性総合相談】

専門の相談員が女性のさまざまな悩みを解決に向けて一緒に考えます。男性の相談にも応じています。電話相談は直通電話へ、面接相談は予約が必要です。

●月曜日（年末年始・祝日は除く）
区役所第一分庁舎区民相談室
電話相談受付（10時～15時半）
☎03-5273-3646
予約受付（8時半～17時）
☎03-5273-4088

●火～土曜日
（年末年始・祝日・休館日は除く）
男女共同参画推進センター
電話相談受付（10時～15時半）
☎03-3353-2000
予約受付（8半時～17時）
☎03-3341-0801

兼松左知子相談員

ウィズ新宿

＊男女共同参画推進センター

「ウィズ新宿」は、男女共同参画の推進に関する取り組みを支援する施設です。この愛称は、設立15周年の際、公募により名付けられました。平成20年1月に「ウィズ新宿」は25周年を迎えます。約四半世紀、学習・交流・連帯の場として親しまれてきた「ウィズ新宿」の事業を紹介します。

啓発事業

＊性と生の講座
さまざまな性の問題について考えます。

＊エンパワーメント講座
エンパワーメント（力をつける）を図るための講座を開催します。

＊パートナーシップ講座
区内の男女共同参画学習団体と講座を共催します。

＊講師派遣事業
区内で活動している団体に、男女共同参画に関する学習のための、講師を派遣します。

＊ウィズ新宿の発行
区民による編集委員会を中心に、男女共同参画に関する話題や行政施策の紹介、講座の情報などを提供する冊子を発行しています。

情報提供事業

図書・資料を収集し、貸出を行っています。新聞の切り抜きなどを分類し、見やすくしています。男女共同参画に関する図書のほか、区立図書館の図書を相互で借りることができます。（要登録）

女性総合相談

27ページの女性総合相談参照

施設の利用

男女共同参画学習団体など登録要件を満たす団体に、会議室（定員30名）を貸し出します。また、地下のワーク室には、印刷機、ロッカーなどがあり、学習活動などに利用することができます。（要登録）

ウィズ新宿
男女共同参画推進センター
〒160-0007　新宿区荒木町16
☎ 03-3341-0801
FAX 03-3341-0740

利用案内

開館時間（休館日を除く）
●図書・資料室、交流コーナー、ワーク室
火～土曜日　9:00～20:00
日曜日　9:00～17:00
●図書の貸出
火～土曜日　9:00～17:00
●会議室
休館日を除く毎日　9:00～22:00
休館日
月曜日、国民の祝日（月曜日の場合は翌日）、年末年始
アクセス
◎都営新宿線
曙橋駅A4出口から徒歩3分
◎都バス
（高71）（宿75）合羽坂下下車徒歩2分
（早81）荒木町下車徒歩5分
◎東京メトロ丸ノ内線
四谷三丁目駅から徒歩10分

新宿区男女共同参画シンポジウム

「～あなたもわたしも～ いきいきチャレンジ！」開催

平成18年11月18日、新宿区立四谷区民ホールにて、新宿区男女共同参画シンポジウム「～あなたもわたしも～いきいきチャレンジ」が開かれました。

当日は作家の中山千夏さんがコーディネーターを務めました。「女性差別の歴史は長く、あらゆる伝統の中に、差別はきめこまかく入り込んでいる。これは一朝一夕には変わらないが、まず差別してきた側、つまり男性側が、きちんと謝る必要があるのではないか」と話の口火を切りました。

それに続いて、日本経済新聞編集委員の岩田三代さん、日本サッカー協会1級審判員の大岩真由美さん、『経産省の山田課長補佐、ただいま育休中』の著者、山田正人さんの3名が、これまでの人生のチャレンジぶりを語り、会場からもたくさんの質問が寄せられるなど、シンポジウムは大いに盛り上がりました。

ここに3人のパネリストのお話を要約してご紹介します。

中山千夏さん
作家
コーディネーター

子育て中は、「とにかく働き続けて、走れるところまで走ろう」と決めた

岩田三代さん
日本経済新聞編集委員

私が就職した昭和50年当時、4年制大学を出た女性の就職先はごく限られていました。入社した日本経済新聞社では女性の記者募集はなく、8、9年ほど校閲の仕事に。その間に結婚、28歳で双子の男子を出産しました。

当時、遅くまで預かってくれる保育所がなく、市の担当者に相談すると「仕事をやめればいい」と軽く言われ、愕然としました。上司に6時までの仕事にしてほしいと頼み、「とにかく働き続けられればいい」と頑張りました。

途中、夫が単身赴任になり、私一人で子育てをした時期もあります。子育ての失敗談は数限りなくありますが、何かあったら子どもを最優先にしよう、走れるところまで走ろう、と決めてやってきました。

その後、デスクや部長を歴任、今も女性の視点で記事を書き続けています。振り返ると、子育て中の私は時間がなくて、いつも焦っていました。じっくり子どもと向き合い、何かを教えるということができなかったことが悔やまれます。

今、優秀な女性はたくさんいます。彼女たちが思う存分に活躍できる社会、子どもにしわ寄せがいかず、男女とも長時間働かなくても子育てができる社会をつくっていかなければなりません。

そんな社会をめざして、これからも記事を書き続けていきます。

サッカーのルールはひとつ 審判に男女差はありません

大岩真由美さん
日本サッカー協会
1級審判員

サッカーの審判員の資格をもつ人は日本に約20万人。4級から始まり3級、2級、女子1級とあり、頂点に位置するのがJリーグの審判を務める1級審判員で、現在120人います。私は平成16年に、女性初の1級審判員の資格を取得しました。

平成11年に女子1級を取得して北海道から上京、その後、国際主審の資格も得て、活躍の場が海外にも広がりました。ただし、そうなると仕事を長く休まなければならず、会社を退職。アルバイトや契約社員として働きながら、海外の試合でも審判を務めました。

1級をとってから、「女性で大丈夫なのか？」と選手だけでなく審判仲間からも危惧されるなど、女性というだけで偏見を持たれたのは確かです。同じ失敗でも「女だから」と言われ、悔しい思いもしました。ある人には「女を捨てろ」「髪を切れ」とまで言われましたが、納得できなかった私は、意地でも髪を切りませんでした。

確かに男性選手は、女性の審判に違和感があるかもしれません。でも、サッカーのルールはひとつです。性別は関係ありません。一審判員としてピッチに立てば、選手もわかってくれるはずです。

これからは、私にしかないチャンスにチャレンジしたい。女子のワールドカップとオリンピック、この2大会に参加して審判を務めたいと思っています。

育児のつらさや喜びは男性にとってもかけがえのない体験

山田正人さん
独立行政法人経済産業研究所・総務副ディレクター

妻とは同じ大学で入省も同期。まったく対等の関係だったのに、最初の双子が産まれて二人の関係が変わってしまいました。3人目ができたとき、妻は育児休暇から復職したばかり。「とても産めない」と言いました。

そのとき、「自分と妻の間には、大きな川が流れている。こちらから半分くらい渡っていかないと、一生この溝は埋まらないな」と思ったのです。それで私が1年間の育休を取ることにしたのですが、職場でいざ、申請書を出すと「まさか」と驚かれ、友人たちには「出世にひびくぞ」と脅されました。

そしていざ育児を始めてみると、奈落の底に突き落とされました。育児の大変さに驚きの連続です。なによりつらいのは日中、大人と話せないこと。妻が帰ってくると、ダーッとしゃべりまくりました。

男ならではの苦労もあります。ご近所からは好奇の目で見られ、マンションの管理人さんには「いいねえ、毎日休みで」と言われ、医者に連れて行くと「今日はお母さんはどうしたの？」と聞かれる。保育園や公園で母親ばかりのところに入っていく勇気が持てず、公園の周りを3周して帰ったこともありました。そんな二重の疎外感の中で、最初の3カ月間は落ち込みました。

でも、育児は自分の成果が目に見えます。子どもの成長を見る喜びと、自分が成長する喜びも実感できます。第三子の第一声は「パッパッパパ」ですよ、うれしかったですね。

育休中は、公務員としてサービスを提供する側から、一市民としてサービスを受ける側に変わり、自分の仕事を見直す良い機会にもなりました。仕事に戻った今も、週2日は育児当番で早く帰ります。その分、仕事中は大変な緊張感を持って当たるようになりました。

女性だけに育児のしわ寄せがいくことなく、男女が対等な関係で社会と関わる男女共同参画社会の実現には、男性が変わることが必要。そのためには粘り強く男性を教育することが重要だと思っています。

編集後記

パートナーシップとは「協力関係」、協力とは「目標のために心を合わせて努力すること」と辞書にありました。人生という長い時の流れの中で、どんなに些細なことでも、目標に向かって協力し達成する喜びを感じ合える相手が人生のパートナー。固定的な役割にとらわれず、相手を思いやり、互いに心を合わせて生きていくことこそが、真のパートナーシップといえるのではないでしょうか。

8%の高ポイントがついてさらに特典満載！
タカシマヤカード
カードご利用時、現金・商品券でのご入金にもポイントが、生鮮食料品のお買物にも1%のポイントがつく。
※本サービスは高島屋でのご利用に限らせていただきます。※商品券は、高島屋商品券・百貨店共通商品券に限らせていただきます。
※詳しくはクレジットコーナーまでお問い合わせください。（03）5361-1111（代表）
Takashimaya SHINJUKU

くつろぎ、味わい、楽しむ。
ホテルのあたたかさ感じてください。

KEIO PLAZA HOTEL
〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1
TEL.（03）3344-0111
http://www.keioplaza.co.jp
JR・私鉄・地下鉄「新宿駅（西口）」「西新宿駅」より徒歩5分
都営大江戸線「都庁前駅」B1出口すぐ

新宿区
〒160-8484東京都新宿区歌舞伎町1-4-1
☎03-3209-1111

発行日◆平成19年3月15日
編集・発行◆新宿区総務部男女共同参画・平和担当
編集協力◆光村印刷株式会社

古紙パルプ配合率100%再生紙を使用

印刷物作成番号
2006-9-2301